

郷桜井堀遺跡2次

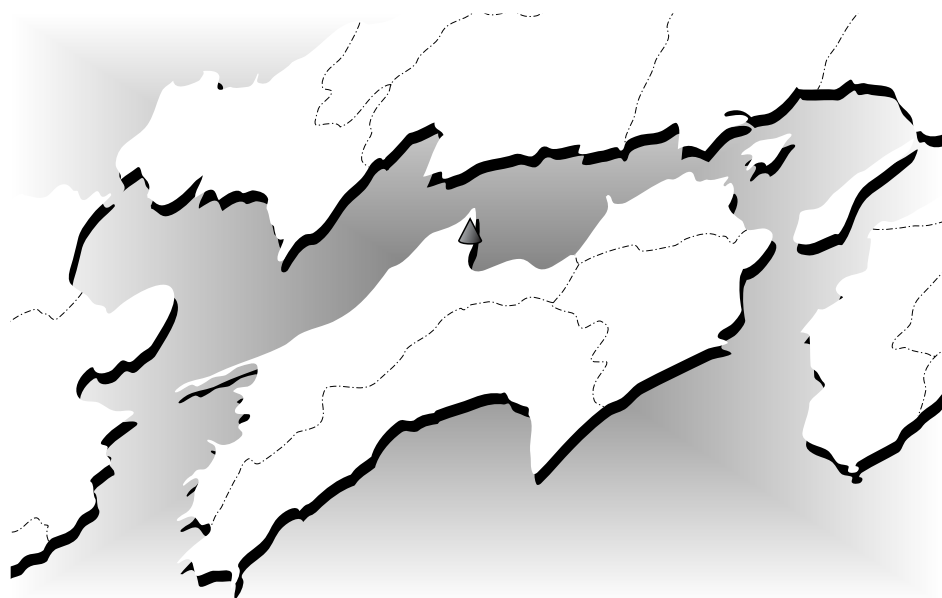
—一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書2—

2007.1

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

郷桜井堀遺跡2次

—一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書2—



2007.1

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、県道桜井山路線改良工事に先立ち、愛媛県の委託を受けて財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが、平成18年10月に愛媛県今治市郷桜井1丁目の同予定地で実施した、埋蔵文化財発掘調査の調査報告書を刊行することとなりました。

今回の調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を検出いたしました。なかでも中世の遺構・遺物などは、当地域の中世の様子を考えるよい資料になるものと思われま

す。本報告書が地域の歴史や考古学研究の資料として、活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に際しましてご理解とご協力をいただきました愛媛県今治地方局をはじめ、ご指導をいただいた関係機関の皆様ならびに地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成19年1月

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
理事長 野本 俊二

例 言

- 1 本報告書は、愛媛県今治市郷桜井に所在する郷桜井堀遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および報告書の作成は、県道桜井山路線の整備に伴い、愛媛県の委託を受け、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成18年10月に実施し、整理作業および報告書の作成は平成18年11月から平成19年1月にかけて実施した。

- 4 発掘調査および整理・報告書の作成は、次の職員が担当した。

郷 田 秀 和 西 川 真 美 福 山 裕 章 眞 鍋 昭 文

- 5 発掘調査および報告書作成において、下記の職員および作業員の協力を得た。

職 員

土井光一郎 若杉美香

現場作業員

池内寿美夫 井出順子 大澤敏郎 越智繁敏 越智徹雄 四方志保 白石由紀
瀬野宏幸 矢野里子

整理作業員

高田正名

- 6 本報告書の執筆・編集は眞鍋が行った。

凡 例

一覧表の略記号表記例

遺構の略号

遺構種別	略号
土坑	SK...
柱穴・小穴	SP...

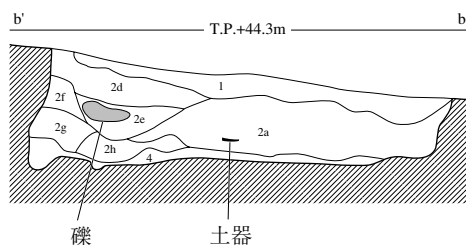
柱穴一覧の土質区分

特 徴	区 分
黒褐色土	A
灰色土混じり暗褐色土	B
橙色ブロック混じり暗褐色土	C

遺物一覧の略記号

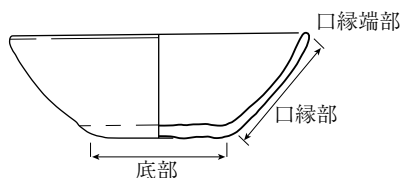
略記号	内 容
L	長
W	幅
H	器高・高さ
T	厚
R	直 径
MR	最 大 径
HR	孔 径
TR	口 径
NR	頸 部 径
LR	底 径
g	重 量
o	外 面
i	内 面
(cm)	推 定 値
[g]	残 存 値

遺構の表現例

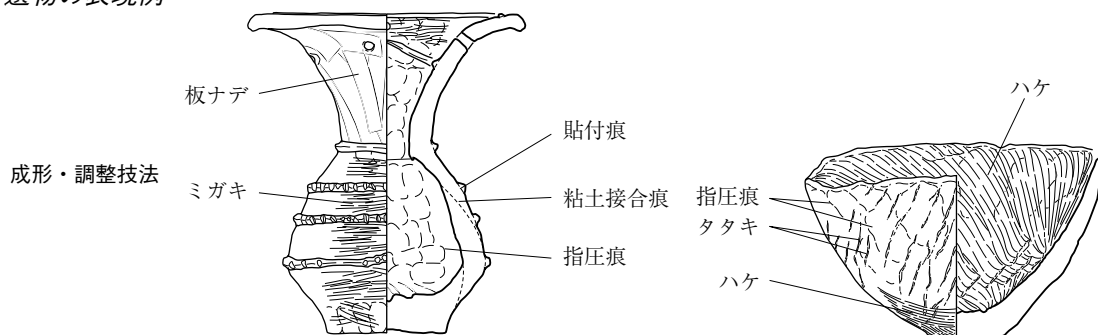


土層断面図中の網伏せは礫、塗りつぶしは土器を示す。

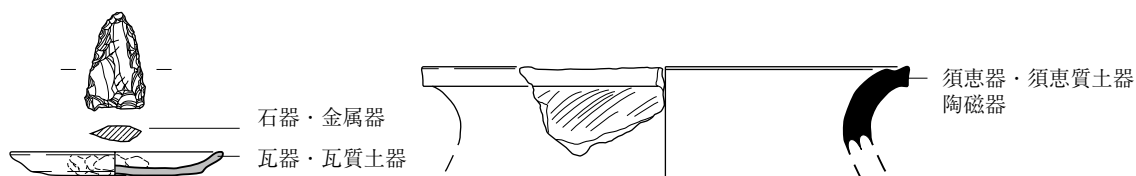
杯の部位名称



遺物の表現例



断面表記



素焼きの中世土器は、皿・杯類を土師器、そのほかを土師質土器とした。

土色・土器の色調については、『新版 標準土色帖(2002年度版)』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に拠る。煩雑さを避けるために、弥生土器の壺形土器・甕形土器などの「形土器」は省略した。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
1 確認調査	1
2 調査の経過	1
第2節 調査の体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
1 縄文時代以前	3
2 弥生時代	3
3 古墳時代	4
4 古代以降	4
第3章 調査の概要	5
第1節 地形と調査区	5
第2節 基本層序	5
第3節 遺構と遺物の概要	6
第4章 弥生時代以前の遺構と遺物	9
第1節 土坑	9
1 SK8	9
第2節 遺物	11
1 土器	11
2 石製品	11
第5章 古墳時代から中世の遺構と遺物	13
第1節 土坑	13
1 SK1	13
2 SK3	13
3 SK4	13
4 SK5	15

5 SK7	15
第2節 柱穴.....	15
1 SP61.....	19
2 SP86.....	19
3 SP189.....	19
4 柱穴出土の遺物	19
第3節 遺物.....	21
1 古代の遺物	22
2 中世の遺物	22
3 その他	22
第6章 まとめ	27

図 目 次

図1 調査区の位置.....	vi
図2 周辺の遺跡分布.....	2
図3 遺構配置・基本層序.....	7
図4 遺構と遺物1(土坑1).....	9
図5 遺構に伴わない遺物1.....	10
図6 遺構と遺物2(土坑2).....	14
図7 遺構と遺物3(柱穴).....	20
図8 遺構に伴わない遺物2.....	21

表 目 次

表1 調査体制.....	1
表2 主要遺構一覧.....	5
表3 柱穴一覧(1).....	16
表4 柱穴一覧(2).....	17

表5	柱穴一覽(3).....	18
表6	柱穴一覽(4).....	19
表7	掲載遺物一覽(1).....	23
表8	掲載遺物一覽(2).....	24
表9	出土遺物一覽(1).....	25
表10	出土遺物一覽(2).....	25
表11	出土遺物一覽(3).....	26

図 版 目 次

図版1	完掘状況(北東より)
図版2	上:西壁基本層序(東より) 下左:SK1遺物出土状況(南より)／下右:SP61土層堆積状況(東より)
図版3	出土遺物1(1・3～7・9～17・19～24・27・29・31・33・35)
図版4	出土遺物2(36～40・42・45・47・50・51)



第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

1 確認調査

愛媛県今治地方局(以下「地方局」)は県道桜井山路線改良工事に伴い、今治市郷桜井1丁目の同予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「桜井小中学校遺跡」に隣接していることから、愛媛県教育委員会(以下「県教委」)とその取り扱いについて協議を行い、平成18年7月に県教委が試掘調査を実施した。その結果、同予定地内の110m²の範囲で遺跡の存在が確認された。

2 調査の経過

試掘調査の結果、工事に先立ち記録保存のための発掘調査の実施が必要となったことから、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター(以下「県埋文センター」)が地方局から委託を受け、平成18年10月に発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成18年9月から調査準備を行い同10月3日に着手した。発掘調査にあたっては、まず調査区の周囲に人力でトレンチを掘削して土層の堆積状況を確認した。その後、機械力を用いて遺構面の直上まで表土層を除去し、遺構・遺物の検出・掘削を行った。それらの作業と並行して平・断面図の測量および写真撮影などの観察・記録を実施した。

なお、測量については、基準点(WGS84系測地成果2000)を調査区周辺に打設してこれを用いた。また、遺物の取り上げについては、層位・遺構ごとに行い、必要に応じて出土状況図を作成し、現地における発掘調査は10月31日に終了した。なお、近接地で平成15年度に県埋文センターが発掘調査を実施し、郷桜井堀遺跡として報告書を刊行していることから(2006 三好)、今回の調査は郷桜井堀遺跡2次調査とした。

発掘調査で得られた資料については、遺構・遺物の図面や写真類を県埋文センターが、出土遺物を県教委がそれぞれ保管している。

なお、遺構写真はデジタル化して原盤とともに保存している。

第2節 調査の体制(表1)

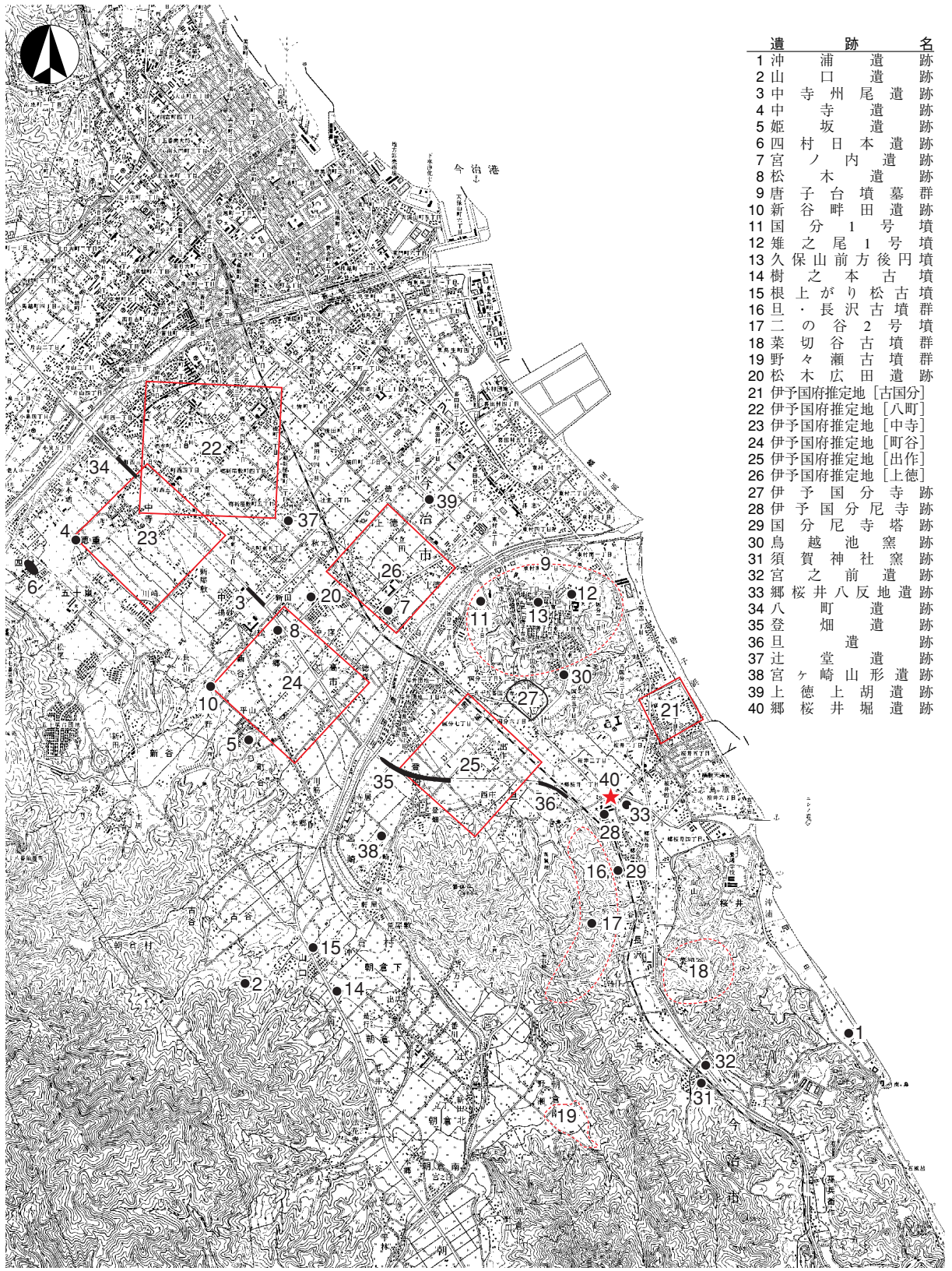
発掘調査および報告書作成の調査体制は表1のとおりである。

参考文献

三好一史 2006 『郷桜井堀遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

表1 調査体制

平成18年度			
理事長	野本俊二		
常務理事	日野孝雄		
総務課長	越智英規		
調査課長	岡田敏彦		
調査第二係長	眞鍋昭文		
主任調査員	西川真美		
派遣調査員	福山裕章		
派遣調査員	郷田秀和		



遺跡名	遺跡	名跡
1	沖浦遺跡	遺跡
2	山口遺跡	遺跡
3	中寺州尾遺跡	遺跡
4	中寺坂遺跡	遺跡
5	姫村日本遺跡	遺跡
6	四宮ノ内遺跡	遺跡
7	宮ノ木遺跡	遺跡
8	松子台墳墓群	墳墓群跡
9	唐新谷畔墳田	墳田跡
10	国分1号墳	墳田跡
11	雄之尾1号墳	墳田跡
12	久保之山本古墳	墳田跡
13	樹根上ガ長沢古墳	墳田跡
14	根上ガ長沢古墳	墳田跡
15	根上ガ長沢古墳	墳田跡
16	根上ガ長沢古墳	墳田跡
17	二の切谷古墳	墳田跡
18	野々木古墳	墳田跡
19	松木古墳	墳田跡
20	松木古墳	墳田跡
21	伊予国府推定地[八町]	推定地跡
22	伊予国府推定地[中寺]	推定地跡
23	伊予国府推定地[町谷]	推定地跡
24	伊予国府推定地[出作]	推定地跡
25	伊予国府推定地[上徳]	推定地跡
26	伊予国府推定地[上徳]	推定地跡
27	伊予国分尼寺跡	跡
28	伊予国分尼寺跡	跡
29	国分尼寺跡	跡
30	鳥越池神社跡	跡
31	須賀神社跡	跡
32	宮前八反地跡	跡
33	桜井八反地跡	跡
34	八登町遺跡	跡
35	八登町遺跡	跡
36	八登町遺跡	跡
37	且辻遺跡	跡
38	宮ヶ崎山形遺跡	跡
39	上徳上胡堀遺跡	跡
40	郷桜井遺跡	跡

図2 周辺の遺跡分布

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

郷桜井堀遺跡が所在する今治平野は高縄半島北東部に形成された沖積平野である。市町村合併以前の旧今治市は今治平野をその市域としていたが、現在の今治市は隣接していた波方町・大西町・玉川町・朝倉村および菊間町と芸予諸島の吉海町・宮窪町・伯方町・関前村の10市町村が合併し、県下最大級の市域を有している。陸地部と島嶼部は来島海峡で隔てられている。来島海峡は古来より海上交通の要衝であるとともに難所として知られ、現在でも国際航路として船舶の往来が頻繁で、同時に、海難事故が多発する海域としても知られている。

市の中心をなす今治平野は地質学的には領家花崗岩帯に属し、海浜に接する幅1～2kmの範囲は海岸砂堆列を含む三角州性の低地で、内陸部は蒼社川・頓田川などの主要河川によって形成された扇状地および扇状地性の氾濫源である。土壌は花崗岩を母材とする風化土(バイラン土)であり、水持ちが悪く、低地部では地下水位が極めて高い。

桜井地区は今治平野南端に位置し、北を独立丘陵の唐子山、西を霊仙山、南東を向山に囲まれた南北に細長い低地である。山裾の集落を郷桜井、臨海部の集落を浜桜井と呼ぶ。

第2節 歴史的環境(図2)

1 縄文時代以前

旧石器時代では、伯方島や大三島など芸予諸島の島嶼部および旧玉川町・旧朝倉村などの内陸部の遺跡から、国府型ナイフ形石器や有舌尖頭器などが出土している。今治平野では最近までは未発見であったが、近年、高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡の自然流路から角錐状石器が出土している。

縄文時代の遺跡は島嶼部や海浜部に数多く分布している。特に、沖浦遺跡(1)や糸大谷遺跡・馬島亀ヶ浦遺跡・江口貝塚などの後晩期の集落が顕著である。一方、内陸部においても阿方遺跡・中寺州尾遺跡(3)・辻堂遺跡(37)などから後晩期の良好な資料が出土している。

2 弥生時代

前期前半では中寺州尾遺跡(3)・阿方遺跡・旦遺跡(36)などで遠賀川系土器が出土している。前期後半から中期初頭にかけては阿方遺跡(貝塚)・片山貝塚・姫坂遺跡(5)、中期前半では宮ヶ崎山形遺跡(38)・中寺遺跡(4)など、丘陵裾部に集落が営まれている。中期後半になるとこれらの集落は衰退し、阿方頭王遺跡群や阿方中屋遺跡など丘陵性の集落が主流となる。後期後半になると四村日本遺跡(6)・松木遺跡(8)などのように再び沖積低地に集落が営まれる。後葉から終末にかけては頓田川左岸に、宮ノ内遺跡(7)や松木広田遺跡(20)などのような大規模集落が営まれている。

3 古墳時代

頓田川右岸の唐子台丘陵は弥生時代終末の墳丘墓に端を発する県内屈指の古墳密集地域で、前期の国分1号墳(11)・雉之尾1号墳(12)、中期のお茶屋池前方後円墳、後期の治平谷古墳群など、百を越える古墳が造営された。また中期以降には旧朝倉村域でも造墓が盛んとなり、中期の樹之本古墳(14)、後期には県下最大の群集墳である野々瀬古墳群(19)などが造営された。

集落遺跡は頓田川水系の新谷畦田遺跡(10)・上徳上胡遺跡(39)などが知られている。最近の調査例では、他地域からの多量の搬入土器が出土した松木広田遺跡(20)が目される。

4 古代以降

古代の今治平野は越智郡と呼ばれ、奈良時代には国府・国分寺(27)・国分尼寺(28)が置かれた伊予の政治・経済・文化の中心地であった。『和名抄』に「国府在越智郡」とあり、国府が今治平野に存在したのは確実であるが、その所在については諸説(21～26)あり、発掘調査で検証された例もなく、未だ特定するには至っていない。国分尼寺は詳細な所在は不明であるが、桜井小中学校付近であることは確実である。また、唐子台丘陵南斜面の鳥越池窯跡(30)や長沢の須賀神社窯跡(31)は、これらの寺院の屋根を葺く瓦を生産した遺跡と考えられている。また、蒼社川右岸には中寺廃寺もある。これら古代寺院の伽藍配置の詳細は不明であるが、発掘調査で確認された遺構は、いずれも正方位を指向し、現存する条里地割りには整合していない。そのほか、長沢から孫兵衛作を経由して周桑平野へ至る峠には、古代山城である永納山城が築かれている。太政官道である南海道は当然これらの官的施設を結んでいた(永納山城→国分尼寺→国分寺→国府)と考えられ、現在の県道桜井山路線から大きくは外れないものと考えられるが、考古学的な検証は未だ行われていない。

中世の遺跡では、頓田川右岸に登畑遺跡(35)・旦遺跡(36)・郷桜井八反地遺跡(33)などの集落遺跡が知られている。また、唐子山山頂には国分城が築かれた。国分城は能島村上氏の居城で、水軍壊滅後は福島正則の居城となった。江戸時代になって藤堂高虎が今治城を築城するまでは、国分城は今治地域の中心であった。

参考文献

- 大瀧雅嗣 1989 『一般国道196号今治道路II』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 田坂嘉則 1994 『郷桜井八反地遺跡』 今治市教育委員会
- 白石聡 1997 『新谷畦田遺跡発掘調査報告書』 今治市教育委員会
- 原畑静佳 1998 『登畑遺跡』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 谷若倫郎 1998 『四村日本遺跡』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 田坂嘉則 1999 『伊予国分尼寺遺跡』 今治市教育委員会
- 三好裕之ほか 2000 『旦遺跡』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 藤村啓修 2001 『伊予国分寺確認調査』 今治市教育委員会
- 白石聡 2002 『松木広田遺跡(松木遺跡群)I』 今治市教育委員会

第3章 調査の概要

第1節 地形と調査区(図1)

調査区の絶対位置は、北緯34°01'52"、東経133°01'50"の交差する付近で、現地表面の標高は3.3m前後である。行政区分上は今治市郷桜井1丁目で、調査前は宅地であった。調査区は頓田川右岸に広がる沖積低地の南端に位置し、南側には、回廊状の谷地形(長沢)が南北に長細くのびる。郷桜井堀遺跡はこの谷から平野への開口部付近に占地している。古代官道は長沢から国分尼寺、郷桜井堀遺跡を經由して国分寺へ至るルートをとっていたものと考えられる。

今治平野は現存する条里地割りが正方位に対して約45度傾いていて、県道桜井山路線もこれに沿っている。このため、調査区は北西から南東へのびる長さ約30m、幅約3.5mの帯状を呈している。調査対象面積は110m²である。

第2節 基本層序(図3)

I層は真砂土造成土、II層は造成前の水田耕作土層である。IIa層は耕作土層、IIc層は酸化鉄集積層であり、酸化鉄の集積度合いは顕著である。造成前の水田は北西側の水田が最も高く、南東へ向かって3段の水田面が確認された。

III層以下は粒径の異なる砂の互層堆積層である。水田面と同様に北西側ほど高い。土層断面でラミナが確認できることから、自然堤防もしくは浜堤の堆積であると考えられるが、シルトや粘土などの細粒堆積物が認められず、比較的粒径の大きな堆積物のみで構成されていることから、浜堤である可能性が高い。III層とIV層上位には遺物が包含される。ともに生成要因を同じくする堆積層であるが、酸化鉄斑紋を含みマンガン結核の発達が著しく、かつ、土壌化が進行した上層部分をIII層、水田耕作の影響を受けず、無機質な砂のみで構成される下層部分をIV層として便宜的に分層した。したがって、出土遺物の時期は明確に分かれるわけではないが、III層は古墳時代以降の遺物、IV層は縄文時代から弥生時代にかけての遺物が主体を占めている。

表2 主要遺構一覧

種別	遺構名	平面形	長さ	幅	深さ	重複関係	単位:cm (*):復元値 [*]:残存値 →**:**を切る,←**:**に切られる		
							掲載遺物	図	図版
土坑	SK1	楕円	120.0	[70.0]	72.0	←SP134	16,17	6	2
	SK2	不明	94.0	不明	22.0	(西壁面で検出)			
	SK3	不整	72.0	不明	28.0	→SP100,←SP95.97	18	6	
	SK4	不明	[118.0]	不明	56.0	←SK5,SP106	19~23	6	
	SK5	楕円	[75.0]	75.0	43.0	→SK4,←SP106	24~28	6	
	SK6	楕円	[90.0]	45.0	40.0	→SP114,←SP110,111			
	SK7	楕円	[108.0]	98.0	11.0	→SK8,←SP98,153,159,189		6	
	SK8	不明	[90.0]	不明	36.0	←SK7,SP98,129,155,159	1,2	4	

第3節 遺構と遺物の概要(図3・表2)

検出した遺構は土坑8基・柱穴189である。検出面はIII層下面である。弥生時代の土坑であるSK8以外の遺構は、詳細な時期が不明なものも多いが、大半は中世の所産と考えられる。土坑については表2に一覧し、各節で詳述した。柱穴は特記すべき事項のあるものについては詳述し、それ以外については表3～6に一覧した。

出土遺物は須恵器・土師器・土師質土器など古墳時代以降の遺物が大半を占めるが、弥生土器も一定量出土している。出土総点数は518点で、内訳は縄文土器1点(内1点掲載)・弥生土器85点(内10点掲載)・須恵器72点(内1点掲載)・土師器182点(内11点掲載)・瓦器22点(内7点掲載)・土師質土器85点(内2点掲載)・須恵質土器29点(内3点掲載)・瓦質土器3点(内1点掲載)・陶器1点・磁器7点(内3点掲載)・土製品18点(内5点掲載)・石器7点(内4点掲載)・金属製品5点(内3点掲載)・その他1点(内1点掲載)である。これらすべての出土遺物について、出土位置や層位等の出土情報・種別・部位・器種・点数等の情報を第5章末の表9～11に一覧した。

また、出土遺物はA～Cの3種に区分して、報告書刊行後に愛媛県教育委員会へ移管するが、各区分は以下の基準によって分別した。

A...報告書掲載遺物。

B...報告書掲載分を除く遺物で、胴部片以外の個体。

C...A・B以外の遺物

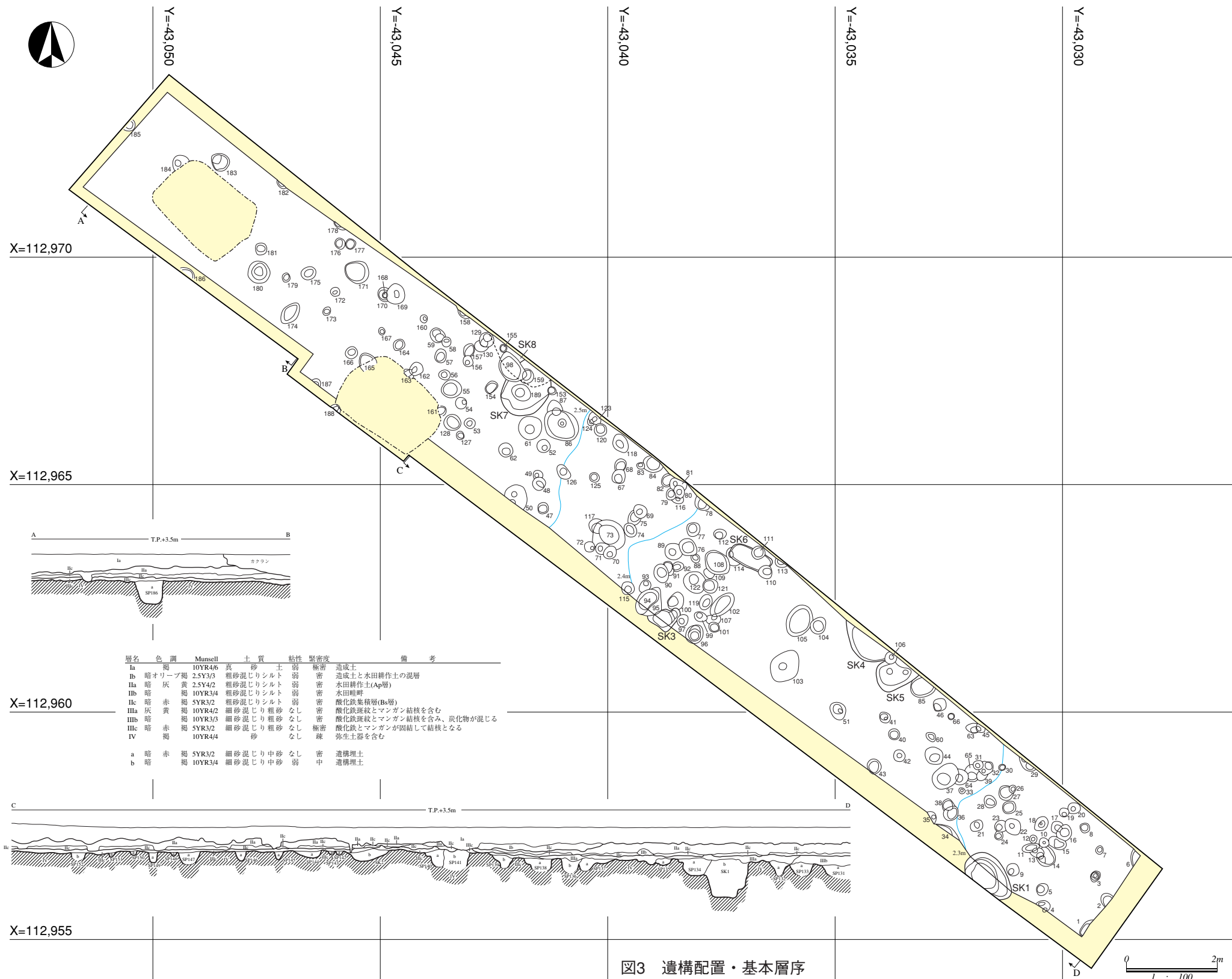


図3 遺構配置・基本層序

第4章 弥生時代以前の遺構と遺物

Ⅲ層下面で土坑1基を検出した。遺物はⅣ層中から縄文土器が、Ⅲ層およびⅣ層と古墳時代以降の遺構埋土中から弥生土器・石器が出土している。Ⅲ層下面の標高は調査区の北西側で2.5m、南東側で2.3mと、わずかではあるが北西側が高く、南東へ向かって緩やかに傾斜している。弥生時代以前の遺構・遺物の分布が調査区の北西部分に偏ることから、浜堤頂部への遺構・遺物の広がりが予測されるが、調査範囲は狭小であり、浜堤の方向や規模などは不明である。

第1節 土坑

1 SK8(図4)

遺構 調査区中央北西部の東壁際で検出した。検出面はⅢ層下面、標高2.44mである。検出範囲は土坑の一部で、残りは調査区外へ続いたため全体形や規模は不明である。また、検出部もSK7・SP98・SP129・SP155・SP159に切られていて、平面プランも不明瞭である。検出面からの深さは36cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底はわずかに丸く窪む。

埋土は3層に分層できる。いずれも砂もしくはシルト層であるが、有機質を含んで土壌化して極暗褐色や黒褐色を呈する。

遺物は埋土中から弥生土器片10点が出土し、胴部片を除く2点を図示した。時期は出土遺物から弥生時代前期前半と考えられる。

遺物 1・2は壺である。1は復元口径31cmを測る大型品で、口縁部は緩く外反して開く。口縁端部は丸みを帯びてわずかに凹面をなす。口頸部境に段を設ける。2は大きな平底で、立ち上がりは明瞭である。

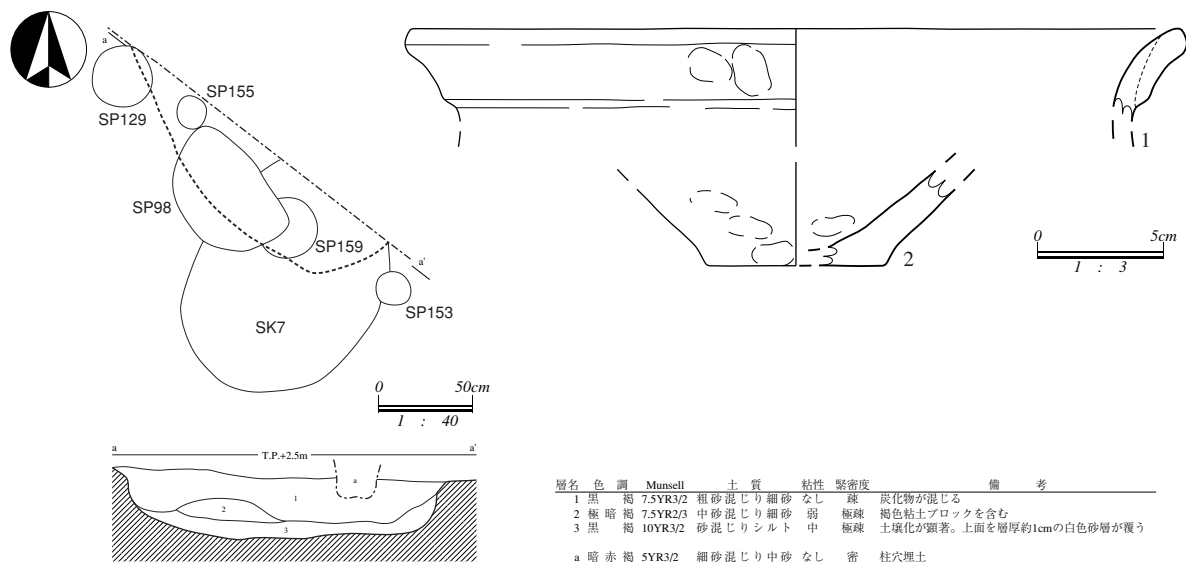


図4 遺構と遺物1(土坑1)

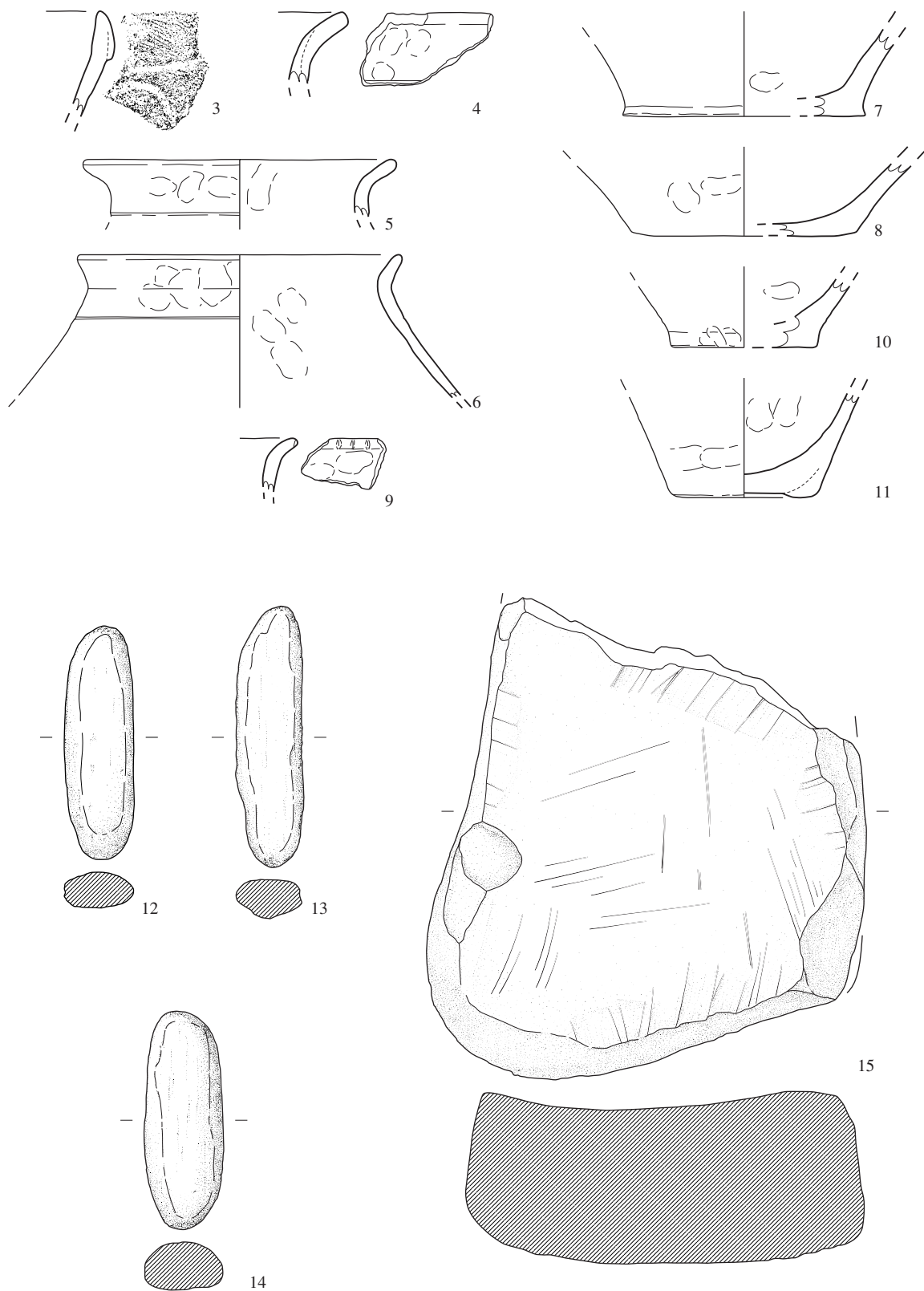


図5 遺構に伴わない遺物1

0 5cm
1 : 3

第2節 遺物

Ⅲ層およびⅣ層と、古墳時代以降の遺構埋土に混入して、縄文土器1点、弥生土器75点、石器7点が出土している。口縁部および底部片のうち残存状況の良好なもの9点、剥片を除く石製品4点を図示した。

1 土器(図5)

3は縄文土器の有文深鉢である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。外面を肥厚させ、縄文を施す。口頸部外面には渦巻き状の沈線文を施す。

4～11は弥生土器である。4～8は壺である。4は口縁部が緩やかに外反して開き、口縁端部は丸みを帯びた面をなす。口頸部境に段を設ける。5は口縁部が直立したのち強く外反する。口縁端部は丸く収める。口頸部境に不明瞭な段を設ける。6は頸部が逆「ハ」字形にすぼまり、口縁部が短く外反する。口縁端部は尖り気味に丸く、口頸部境から下がった位置に直線文を1条巡らす。7・8は大きな平底である。

9～11は甕である。9は直立する胴上半部から口縁部が緩く外反して開く。口縁端部は丸く収め、浅い刻目を施す。10は底部が直立気味に立ち上がる。

2 石製品(図5)

12～14は片岩の棒状礫を用いた敲石である。両端部に敲打痕が認められる。15は砂岩製の石皿である。上半部を欠損する。表面は著しく磨滅して凹面となるほか、左側面・下面・裏面にも磨耗が認められる。

第5章 古墳時代から中世の遺構と遺物

Ⅲ層下面で土坑7基・柱穴189を検出した。遺構や遺物の分布に顕著な偏りは認められず、調査区の全域にはほぼ均質に分布する。また、出土遺物の時期は古墳時代から16世紀に及び、断続的に遺跡が営まれていたものと考えられるが、主体を占めるのは12世紀後半から13世紀前半にかけての遺物であり、集落の盛期は中世前半期であったものと考えられる。

第1節 土坑

1 SK1(図6)

遺構 調査区南東部の西壁際で検出した。検出面はⅢ層下面、標高2.36mである。SP134に切られる。一部は調査区外へ続くが、平面形は長径1.2mの楕円形を呈する。検出面からの深さは72cmを測る。壁面は急勾配で二段に掘り込まれ、段に沿って花崗岩の角礫を並べる。坑底は平坦である。

埋土は5層に分層できる。いずれも砂もしくはシルト混じりの砂層であるが、有機質を含んで土壌化し、特に下層の4・5層は土壌化が顕著で黒褐色を呈する。

遺物は埋土中から土師器11点・瓦器2点・土師質土器14点・土製品1点(瓦)が出土した。このうち4層中から出土し、遺構に伴うと判断できる土師器1点と瓦器1点を図示した。時期は出土遺物から中世と考えられる。

遺物 16は土師器杯である。口縁部は直線的に外上方へのびる。17は瓦器小皿である。稜は不明瞭で、口縁部はわずかに内湾する。

2 SK3(図6)

遺構 調査区中央部の西壁際で検出した。検出面はⅢ層下面、標高2.44mである。SP95・SP97に切られる。平面形は不整形である。検出面からの深さは28cmを測る。壁面は緩やかで、坑底は丸く窪む。

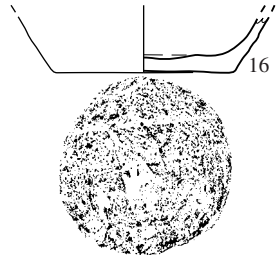
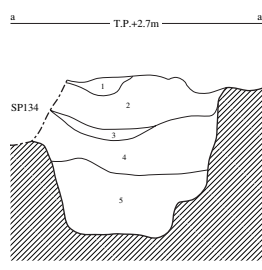
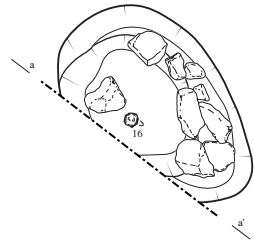
埋土は3層に分層できる。砂をベースとするが灰・焼土・炭化木材が多量に混じる。

遺物は埋土中から須恵器1点・土師器3点・土師質土器1点・瓦質土器1点が出土した。須恵器以外は小破片で埋土中に混入したものである。須恵器1点を図示した。時期は古墳時代以降と考えられるが、詳細は不明である。

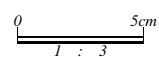
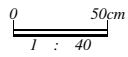
遺物 18は須恵器の杯蓋である。稜は明瞭で、口縁端部はわずかに外方へ突出し、内傾する不明瞭な段をなす。

3 SK4(図6)

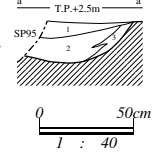
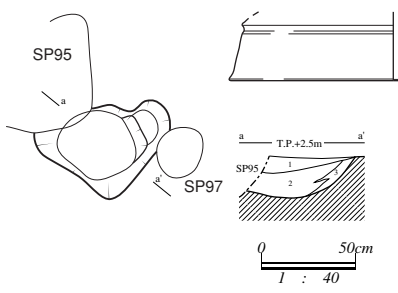
遺構 調査区南東部の東壁際で検出した。検出面はⅢ層下面、標高2.38mである。SK5・SP106に



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	褐	7.5YR4/3	細砂混じり中砂	なし	中	マンガン結核を含む
2	暗褐	10YR3/3	細砂混じり中砂	弱	やや密	マンガン結核を含む
3	灰黄褐	10YR4/2	シルト混じり細砂	弱	やや疎	
4	黒褐	10YR2/2	細砂混じり中砂	なし	やや疎	粗砂を含む
5	黒	7.5YR3/2	細砂混じり粗砂	なし	疎	

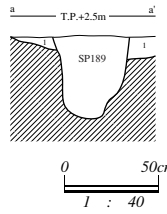
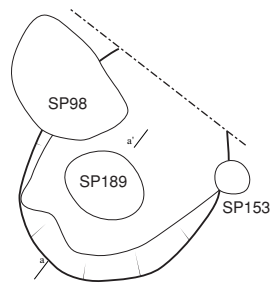


SK1



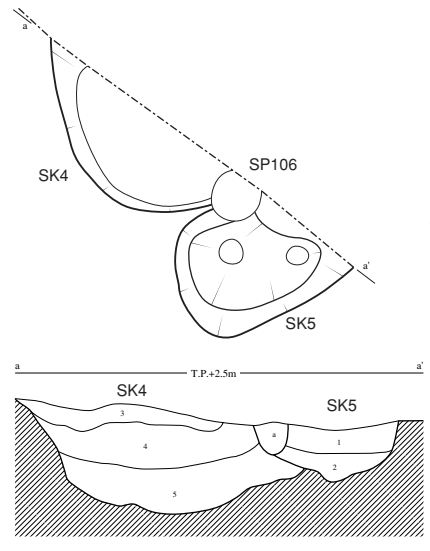
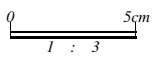
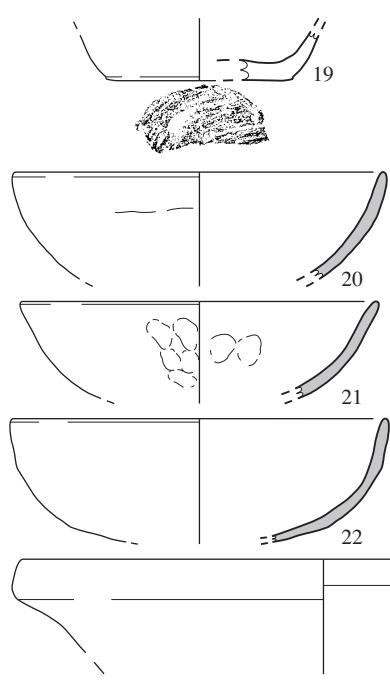
層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	暗褐	7.5YR3/4	灰・焼土混じり細砂	なし	やや密	多量の灰を含む
2	黄	2.5Y4/1	細砂混じり粗砂	なし	密	
3	黒	10YR2/1	炭化木材	—	—	

SK3



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	極暗褐	7.5YR2/3	シルト混じり砂	極弱	やや密	

SK7



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	黒	7.5YR2/2	細砂混じり中砂	なし	密	酸化鉄斑紋ないし結核が混じる
2	黒	10YR3/2	細砂混じり中砂	なし	やや疎	炭化物が混じる
3	黒	7.5YR2/2	細砂混じり中砂	なし	やや疎	
4	黒	10YR2/3	中砂混じり粗砂	なし	疎	炭化物が混じる
5	極暗褐	7.5YR2/3	粗砂混じり中砂	なし	極疎	炭化物が少量混じる

a 黒褐 10YR3/2 粗砂混じり細砂 なし 密 SP106埋土

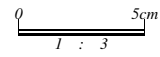
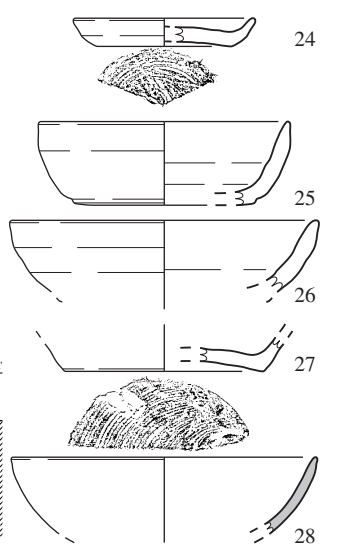


図6 遺構と遺物2(土坑2)

切られる。検出範囲は土坑の一部で、残りは調査区外へ続くため全体形や規模は不明である。検出面からの深さは56cmを測る。壁面は急勾配で、坑底は丸く窪む。

埋土は3層に分層できる。いずれも砂層であるが、有機質を含んで土壌化し、黒褐色を呈する。

遺物は埋土中から弥生土器1点・須恵器3点・土師器14点・瓦器10点・土師質土器5点・須恵質土器1点・土製品1点(瓦)・石器1点(剥片)・金属製品1点(鉄滓)が出土した。このうち比較的残存状態良好な5点を図示した。時期は出土遺物から中世と考えられる。

遺物 19は土師器杯である。口縁部が内湾気味に立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りである。20～22は瓦器椀である。20・22は口縁部が内湾し、21は直線的に外上方へのびる。23は東播系の捏鉢である。口縁端部が直立する。

4 SK5(図6)

遺構 調査区南東部の東壁際で検出した。検出面はIII層下面、標高2.26mである。SK4を切り、SP106に切られる。一部が調査区外へ続くが、平面形は短径75cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは43cmを測る。壁面は急勾配で、坑底は丸く窪む。

遺物は埋土中から弥生土器8点・須恵器14点・土師器19点・瓦器1点・土師質土器6点が出土した。このうち比較的残存状態良好な5点を図示した。時期は出土遺物から中世と考えられる。

遺物 24は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。25～27は土師器杯である。25・26は器壁が厚ぼったく、口縁部は内湾気味である。27は口縁部が外上方へ直線的にのびる。27の底部の切り離しは回転糸切りである。28は瓦器椀である。

5 SK7(図6)

遺構 調査区中央北西部の東壁際で検出した。検出面はIII層下面、標高2.38mである。SK8を切り、SP98・SP153・SP159・SP189に切られる。一部が調査区外へ続くが、平面形は短径98cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは11cmを測る。壁面は浅くなだらかで、坑底は平坦である。

遺物は出土していない。時期は古墳時代以降と考えられるが、詳細は不明である。

第2節 柱穴

III層下面で検出した柱穴は189である。調査区全域に極めて密に分布し、概ね古墳時代以降の所産と考えられるが、個別の時期の詳細については不明確なものが多い。また、調査区が狭小で、具体的な建物配置を抽出することができなかった。これらの柱穴のうち、柱痕が認められたSP61・SP86・SP189については詳述するが、そのほかは、平面形状・規模・埋土・重複関係等の諸元を表3～6に、出土遺物については章末の表9～11にまとめた。また柱穴埋土中から遺存状態良好な遺物が出土している。これらについては柱穴出土の遺物として図示した。

表3 柱穴一覧(1)

単位:cm (*):復元値 [*]:残存値 →***を切る,←***に切られる

遺構名	平面形	土質	長径	短径	深さ	重複関係	備考	図	図版
SP1	不明	A	[38.0]	—	6.0				
SP2	円	A	30.0	—	15.0				
SP3	円	A	25.5	—	31.5				
SP4	楕円	A	[32.0]	—	15.0				
SP5	円	A	26.0	—	39.5				
SP6	不明	A	[30.0]	—	11.0				
SP7	円	B	18.0	—	17.5				
SP8	円	B	23.0	—	29.0				
SP9	円	A	28.0	—	26.0				
SP10	円	A	20.0	—	38.5	→SP14,15			
SP11	楕円	A	37.0	19.5	6.0	→SP12,13,14	炭化物が混じる		
SP12	円	A	18.0	—	5.0	←SP11			
SP13	楕円	A	30.5	23.0	22.0	→SP14,←SP11			
SP14	円	A	43.5	—	35.0	←SP10,11,13			
SP15	楕円	A	33.5	23.0	38.0	→SP16,←SP10			
SP16	楕円	A	35.0	29.0	30.0	→SP17,←SP15			
SP17	円	B	27.5	—	30.0	←SP16			
SP18	楕円	A	36.0	29.5	29.0				
SP19	円	A	21.0	—	26.0	→SP20			
SP20	円	A	27.0	—	34.5	←SP19			
SP21	円	A	29.0	—	29.0				
SP22	楕円	A	36.0	30.0	34.0	→SP23			
SP23	円	B	29.0	—	37.5	→SP24,←SP22			
SP24	円	B	20.0	—	18.0	←SP23			
SP25	円	A	29.5	—	18.0				
SP26	円	A	17.0	—	23.5	→SP27			
SP27	円	B	33.5	—	13.0	←SP26			
SP28	楕円	B	31.0	26.0	8.5				
SP29	不明	A	[43.0]	—	28.0				
SP30	円	A	17.0	—	5.0				
SP31	円	A	23.0	—	24.0	→SP32,65			
SP32	楕円	A	29.5	22.0	18.0	→SP39,65,←SP31			
SP33	円	A	17.0	—	12.0				
SP34	不明	A	[54.0]	—	10.0				
SP35	不明	A	[25.0]	—	20.0				
SP36	楕円	A	34.0	28.0	21.0	→SP38			
SP37	楕円	A	63.0	51.0	30.0	→SP64			
SP38	円	A	28.0	—	31.5	←SP36			
SP39	円	A	20.0	—	30.0	→SP65,←SP32			
SP40	円	A	26.5	—	21.0				
SP41	円	A	24.5	—	35.0				
SP42	円	A	26.0	—	[16]				
SP43	円	A	28.0	—	31.0				
SP44	楕円	A	45.0	37.0	23.5				
SP45	円	A	23.0	—	30.5	→SP63			
SP46	円	A	30.0	—	24.0				
SP47	円	A	25.0	—	16.0				
SP48	円	B	30.0	—	36.5	→SP49			
SP49	円	B	21.5	—	8.0	←SP48			
SP50	不明	B	[52.0]	—	35.0				
SP51	円	A	33.0	—	26.0				
SP52	円	A	27.5	—	36.0				
SP53	円	A	21.5	—	25.0				
SP54	円	B	24.0	—	32.0				
SP55	円	B	41.5	—	17.0				
SP56	円	B	24.0	—	16.0				
SP57	円	B	25.0	—	21.0				
SP58	円	B	19.0	—	13.0	→SP59			
SP59	円	B	19.0	—	18.0	←SP58			
SP60	楕円	A	27.0	18.0	30.0				

表4 柱穴一覧(2)

単位:cm (*):復元値 [*]:残存値 →***を切る,←***に切られる

遺構名	平面形	土質	長径	短径	深さ	重複関係	備考	図	図版
SP61	円	A	45.0	—	42.0		柱痕	7	2
SP62	円	A	29.0	—	27.5				
SP63	円	A	25.0	—	40.0	←SP45			
SP64	円	A	32.0	—	30.5	→SP65,←SP37			
SP65	円	A	30.0	—	21.0	←SP31,32,39,64			
SP66	円	A	14.0	—	10.0				
SP67	円	A	31.5	—	34.0	→SP68			
SP68	円	A	32.0	—	9.0	←SP67			
SP69	円	B	32.0	—	23.0	→SP75			
SP70	円	A	29.0	—	37.0	→SP71,73			
SP71	円	A	31.5	—	15.0	→SP73,←SP70			
SP72	円	B	24.0	—	12.0	→SP73			
SP73	円	B	67.0	—	30.0	→SP117,←SP70,71,72			
SP74	円	B	28.0	—	12.0	→SP75			
SP75	橢円	B	[25.0]	20.0	24.0	←SP69,74			
SP76	橢円	C	44.0	38.0	21.0	→SP88,89			
SP77	円	B	32.0	—	20.0				
SP78	円	B	40.0	—	34.0				
SP79	橢円	B	26.0	19.0	11.0	→SP80,81,116			
SP80	円	B	27.0	—	41.0	→SP81,116,←SP79			
SP81	円	B	37.0	—	42.0	→SP82,←SP79,80			
SP82	橢円	B	[32.0]	22.0	13.0	←SP81			
SP83	円	B	17.0	—	7.0	→SP84			
SP84	円	B	40.0	—	39.0	←SP83			
SP85	円	B	54.0	—	13.0	←SK5			
SP86	橢円	A	78.5	65.0	17.5	→SP87	柱痕	7	
SP87	円	A	36.5	—	29.0	←SP86			
SP88	円	B	19.0	—	15.0	←SP76			
SP89	円	B	37.0	—	43.0	←SP76			
SP90	橢円	B	41.5	33.0	41.0	→SP91			
SP91	橢円	B	33.0	17.0	22.0	→SP92,←SP90			
SP92	円	B	23.0	—	15.0	←SP91			
SP93	円	B	19.5	—	13.0	←SP94			
SP94	橢円	C	[36.0]	34.0	24.0	→SP93,95			
SP95	橢円	B	41.0	22.0	—	→SK3,←SP94			
SP96	円	B	36.0	—	28.0				
SP97	円	B	27.0	—	28.0	→SK3			
SP98	橢円	B	63.0	45.0	8.0	→SK7,8,SP159			
SP99	円	B	29.0	—	18.0	→SP107			
SP100	橢円	B	[40.0]	30.0	31.0	←SK3			
SP101	円	B	25.0	—	19.0	→SP107			
SP102	橢円	B	65.0	35.0	29.0	→SP107			
SP103	橢円	B	78.0	60.5	41.0				
SP104	円	C	36.0	—	36.0	→SP105			
SP105	橢円	B	71.0	54.0	26.0	←SP104			
SP106	円	A	26.0	—	47.0	→SK4,5			
SP107	円	B	31.5	—	28.0	←SP99,101,102			
SP108	橢円	C	63.0	48.0	19.0	→SP109,114			
SP109	不明	B	23.0	—	—	←SP108			
SP110	円	A	31.0	—	27.0	→SK6			
SP111	円	C	30.0	—	37.0	→SK6			
SP112	円	A	25.0	—	29.0				
SP113	円	A	23.0	—	17.0				
SP114	円	C	39.0	—	16.0	←SK6,SP108			
SP115	円	A	30.0	—	31.0				
SP116	橢円	C	27.0	11.0	23.0	←SP79,80			
SP117	円	A	29.0	—	31.0	←SP73			
SP118	橢円	B	43.0	28.0	33.0				
SP119	円	A	30.0	—	26.0				
SP120	円	A	28.0	—	10.0	→SP123			

表5 柱穴一覧(3)

単位:cm (*):復元値 [*]:残存値 →***を切る,←***に切られる

遺構名	平面形	土質	長径	短径	深さ	重複関係	備考	図	図版
SP121	円	A	33.0	—	30.0	→SP122			
SP122	円	C	45.0	—	24.0	←SP121			
SP123	円	A	28.0	—	32.0	→SP124,←SP120			
SP124	円	B	16.0	—	10.0	←SP123			
SP125	円	B	22.0	—	14.0				
SP126	楕円	B	38.0	26.0	38.0				
SP127	円	B	19.0	—	19.0				
SP128	円	B	36.0	—	44.0				
SP129	円	B	40.0	—	34.0	→SK8,SP130			
SP130	円	B	28.0	—	17.0	←SP129			
SP131	不明	A	—	—	[20.0]		西壁面で検出		
SP132	不明	A	51.0	—	[29.0]	→SP133	西壁面で検出		
SP133	不明	A	48.0	—	[27.0]	←SP132	西壁面で検出		
SP134	不明	A	72.0	—	38.0	→SK1	西壁面で検出		
SP135	不明	A	35.0	—	13.0		西壁面で検出		
SP136	不明	B	42.0	—	[24.0]	→SP137	西壁面で検出		
SP137	不明	A	[73.0]	—	[27.0]	←SP136	西壁面で検出		
SP138	不明	A	62.0	—	[27.0]		西壁面で検出		
SP139	不明	B	43.0	—	[27.0]		西壁面で検出		
SP140	不明	A	44.0	—	[36.0]	→SP141	西壁面で検出		
SP141	不明	B	[58.0]	—	[37.0]	←SP140	西壁面で検出		
SP142	不明	A	16.0	—	8.0		西壁面で検出		
SP143	不明	A	15.0	—	7.0		西壁面で検出		
SP144	不明	A	56.0	—	13.0		西壁面で検出		
SP145	不明	A	19.0	—	16.0		西壁面で検出		
SP146	不明	A	24.0	—	20.0		西壁面で検出		
SP147	不明	A	44.0	—	[25.0]		西壁面で検出		
SP148	不明	A	11.0	—	8.0		西壁面で検出		
SP149	不明	A	20.0	—	21.0		西壁面で検出		
SP150	不明	A	12.0	—	8.0		西壁面で検出		
SP151	不明	A	12.0	—	9.0		西壁面で検出		
SP152	不明	B	30.0	—	[13.0]		西壁面で検出		
SP153	円	A	18.0	—	4.0	→SK7			
SP154	円	A	25.0	—	19.0				
SP155	円	A	18.5	—	26.0	→SK8			
SP156	円	B	22.0	—	31.0	→SP157			
SP157	楕円	B	29.0	22.0	12.0	←SP156			
SP158	不明	A	[26.0]	—	23.0				
SP159	円	B	32.0	—	20.0	→SK7,8,←SP98			
SP160	円	B	17.0	—	14.0				
SP161	円	B	21.0	—	20.0				
SP162	円	C	30.0	—	28.0	→SP163			
SP163	不明	C	[25.0]	—	29.0	←SP162			
SP164	円	B	27.0	—	8.0				
SP165	楕円	A	[44.0]	40.0	11.0				
SP166	円	A	28.0	—	14.0				
SP167	円	B	15.0	—	7.5				
SP168	円	A	14.5	—	17.0	→SP170,←SP169			
SP169	円	A	45.0	—	26.0	→SP168,170			
SP170	円	B	31.0	—	15.0	←SP168,169			
SP171	円	B	50.0	—	17.0				
SP172	円	B	22.0	—	24.0				
SP173	楕円	B	22.0	16.0	41.0				
SP174	楕円	B	54.0	34.0	17.0				
SP175	楕円	B	33.0	27.0	11.0				
SP176	円	B	25.0	—	10.0				
SP177	楕円	B	29.0	23.0	5.0				
SP178	不明	A	33.0	—	25.0				
SP179	円	B	26.0	—	8.0				
SP180	円	B	45.0	—	41.0				

表6 柱穴一覧(4)

単位:cm (*):復元値 [*]:残存値 →***を切る,←***に切られる

遺構名	平面形	土質	長径	短径	深さ	重複関係	備考	図	図版
SP181	円	B	28.0	—	15.0				
SP182	不明	A	28.0	—	16.0				
SP183	円	B	39.0	—	34.0				
SP184	不明	B	[40.0]	—	41.0				
SP185	不明	B	[30.0]	—	36.0				
SP186	不明	B	[44.0]	—	38.0				
SP187	不明	B	[23.0]	—	19.0				
SP188	不明	B	[22.0]	—	32.0				
SP189	円	A	39.0	—	42.0	→SK7	柱痕	7	

1 SP61(図7)

遺構 調査区中央部で検出した。検出面はIII層下面、標高2.52mである。平面形は直径45cmの円形を呈する。検出面からの深さは42cmを測る。埋土は2層に分層できる。1層は黄褐色土ブロックと褐色砂の混雑土で、柱の抜き取り痕に流入した土砂、2層は掘方埋土である。柱痕の直径は16cmである。

埋土中から須恵器1点・土師器1点が出土したが、いずれも小片で、時期の詳細は不明である。

2 SP86(図7)

遺構 調査区中央部で検出した。検出面はIII層下面、標高2.52mである。SP87を切る。平面形は長径78.5cm、短径65cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは17.5cmを測る。埋土は2層に分層できる。1層は暗褐色を呈する砂で、柱の抜き取り痕に流入した土砂、2層は暗褐色土ブロックが混じる掘方埋土である。柱痕の直径は26cmである。

埋土中から須恵器1点・土師器1点・土師質土器1点が出土したが、いずれも小片で、時期の詳細は不明である。

3 SP189(図7)

遺構 調査区中央北西部で検出した。検出面はIII層下面、標高2.4mである。SK7を切る。平面形は直径39cmの円形を呈する。検出面からの深さは42cmを測る。埋土は3層に分層できる。1層は黄褐色土ブロックが混じる黒褐色を呈する砂で、柱の抜き取り痕に流入した土砂、2・3層は掘方埋土である。柱痕の直径は18cmである。

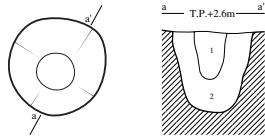
遺物は出土しておらず、時期の詳細は不明である。

4 柱穴出土の遺物(図7)

土師器(29～30) 29・30は杯である。29は口縁部が外反気味に開く。外底面にスノコ痕が看取できる。30は口縁部が内湾気味で、口縁端部がわずかに外反する。

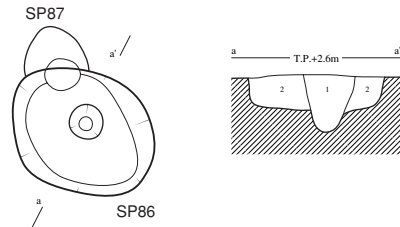
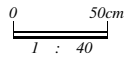
土師質土器(31) 31は燭台の脚台部と考えられる。脚台部は低平で脚端部が外方へ突出する。底部の切り離しは回転糸切りである。

瓦器(32) 32は椀である。胴部は浅い杯状で、口縁部はわずかに内湾する。



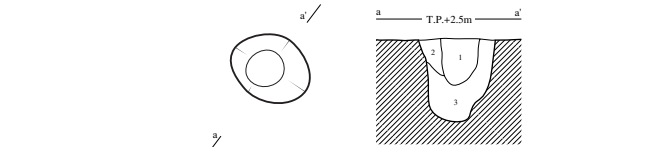
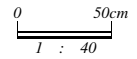
層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	褐	7.5YR4/4	細砂混じり中砂	極弱	中	黄褐色土ブロックと褐色砂の混濁土。柱痕
2	暗褐	10YR3/4	細砂混じり中砂	極弱	やや疎	掘方埋土

SP61



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	暗褐	10YR3/3	細砂混じり粗砂	なし	密	柱痕
2	にぶい黄褐	10YR4/3	細砂混じり粗砂	なし	密	暗褐色土ブロックが混じる。掘方埋土

SP86



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	黒褐	7.5YR3/2	細砂混じり粗砂	極弱	やや疎	黄褐色土ブロックが混じる。炭化物を少量含む。柱痕
2	褐	7.5YR4/3	シルト混じり砂	弱	疎	黄褐色土ブロックが混じる
3	暗褐	10YR3/4	シルト混じり砂	中	極疎	

SP189

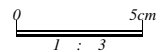
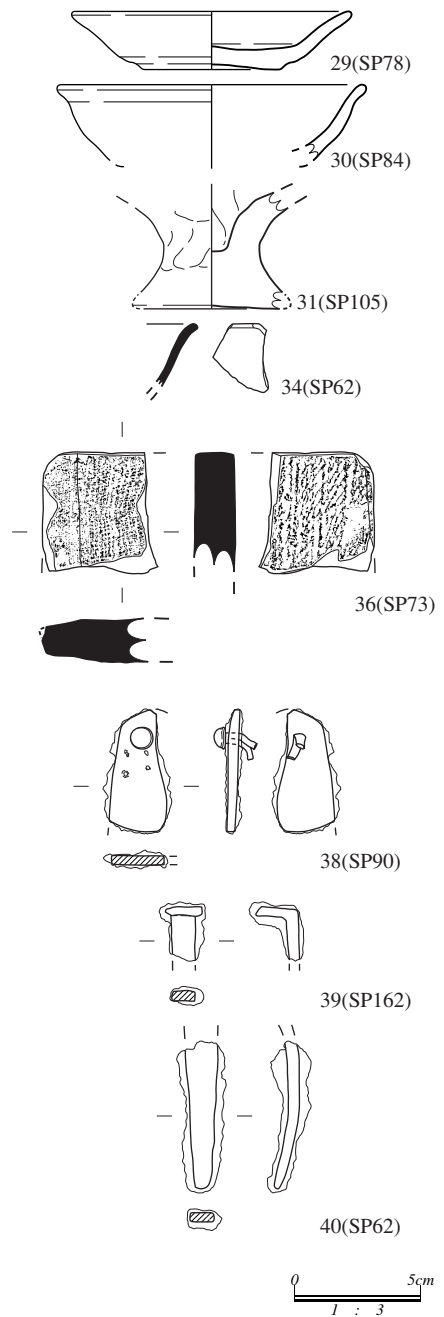
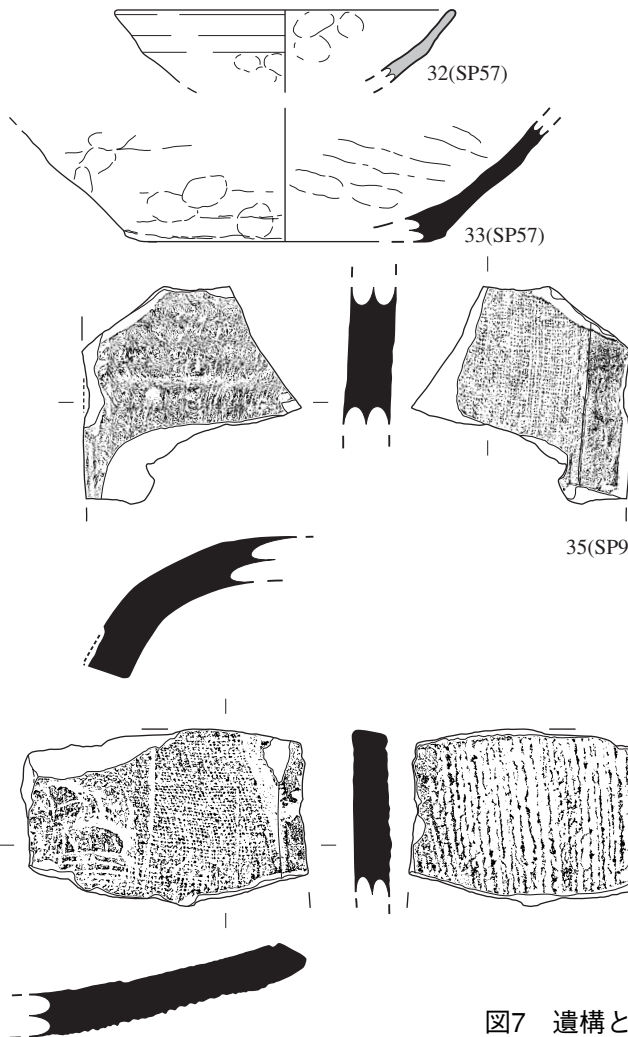
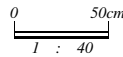


図7 遺構と遺物3(柱穴)

須恵質土器(33) 33は東播系捏鉢の底部である。

磁器(34) 白磁碗の口縁部である。口縁端部が外反する。

瓦(35~37) 35は丸瓦、36・37は平瓦である。凹面に布目、凸面に縄目を留める。胎土は緻密で、焼成堅緻な須恵質である。

金属製品(38~40) 38は腹巻の胸板右上端部片と考えられる。割りピン状を呈する銅製の鋳が認められる。39・40は鉄製の和釘である。39は頭部片、40は頭部を欠損する。頭部を片側に折り曲げた角釘である。身が極端に扁平であり、鏝の可能性も考えられる。

第3節 遺物(図8)

土坑の埋土に混入した遺物と、III層およびIV層から出土した遺物の中から特徴的なものを図

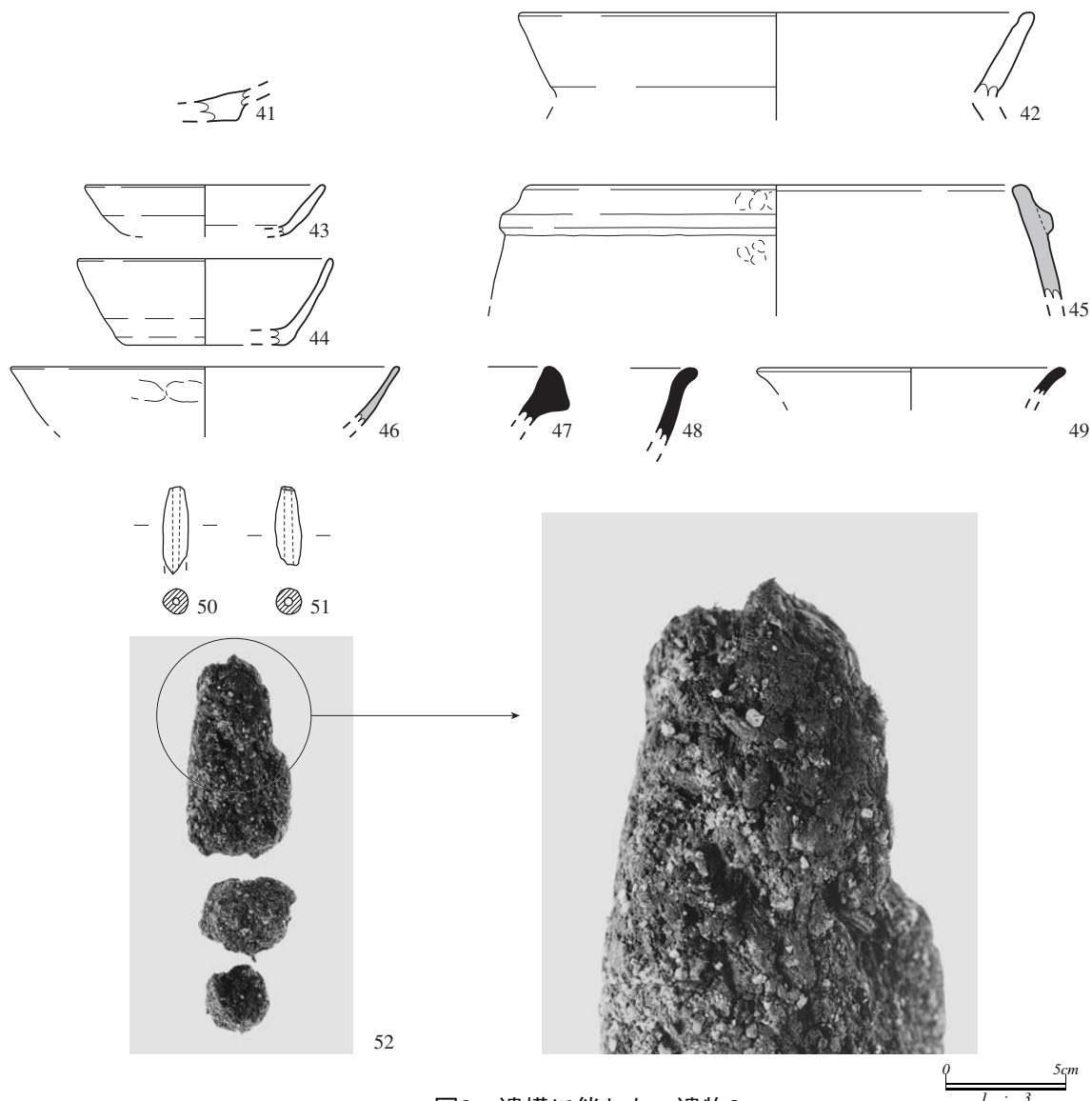


図8 遺構に伴わない遺物2

示した。

1 古代の遺物(41・42)

41は円盤高台をもつ土師器椀である。42は土師質土器の甕である。口縁部が外上方へのびる。

2 中世の遺物(43～49)

43・44は土師器杯、45は瓦質土器の三足羽釜である。46は和泉型瓦器椀、47は東播系捏鉢、48は青磁碗、49は白磁碗である。

3 その他(50～52)

50・51は管状土錘である。52は炭化米の棒状塊である。

表7 掲載遺物一覧(1)

番号	種別	器種	出土情報	法量	外面色調 内面色調	調整	備考	図	図版
1	弥生	壺	SK8	TR(31.0)	o:10YR6/3 i:10YR6/4			4	3
2	弥生	壺	SK8	LR(7.0)	o:10YR7/4 i:10YR6/4			4	
3	縄文	深鉢	IV層	—	o:7.5YR3/2 i:7.5YR3/2			5	3
4	弥生	壺	IV層	—	o:10YR6/6 i:10YR6/8			5	3
5	弥生	壺	IV層	TR(14.9),NR(12.7)	o:7.5YR6/4 i:7.5YR6/4			5	3
6	弥生	壺	III層	TR(15.8),NR(15.0)	o:7.5Y7/6 i:7.5Y7/6			5	3
7	弥生	壺	III層	LR(11.8)	o:10YR3/3 i:7.5YR6/6			5	3
8	弥生	壺	IV層	LR(11.2)	o:7.5YR4/3 i:10YR4/3			5	
9	弥生	甕	III層	—	o:7.5Y6/6 i:7.5Y6/6			5	3
10	弥生	甕	IV層	LR(7.0)	o:7.5YR5/6 i:7.5YR5/6			5	3
11	弥生	甕	IV層	LR(7.0)	o:5YR5/4 i:5YR5/4			5	3
12	石製品	敲石	SP89	L11.6,W3.4,T1.8,g127.0			緑泥片岩	5	3
13	石製品	敲石	SP89	L12.9,W3.3,T1.95 g148.6			緑泥片岩	5	3
14	石製品	敲石	SP111	L10.8,W3.9,T2.4,g148.8			結晶片岩	5	3
15	石製品	石皿	III層	L[23.8],W[21.7],T8.5 g[6910.0]			砂岩	5	3
16	土師器	杯	SK1	LR7.0	o:10YR6/6 i:10YR6/4	回転糸切り		6	3
17	瓦器	小皿	SK1	TR(10.0)	o:5Y5/1 i:5Y5/1			6	3
18	須恵器	杯蓋	SK3	TR(13.0)	o:7.5Y4/1 i:7.5Y4/1			6	
19	土師器	杯	SK4	TR(7.4)	o:7.5YR6/6 i:5YR6/6	回転糸切り		6	3
20	瓦器	椀	SK4	TR(14.6)	o:7.5Y5/1 i:7.5Y8/1			6	3
21	瓦器	椀	SK4	TR(14.0)	o:2.5Y8/2 i:2.5Y8/1			6	3
22	瓦器	椀	SK4	TR(14.7)	o:7.5Y5/1 i:7.5Y4/1			6	3
23	須恵質	捏鉢	SK4	TR(23.8)	o:2.5Y7/1 i:2.5Y7/2		東播系	6	3
24	土師器	小皿	SK5	TR(7.2),LR(5.4),H1.1	o:7.5YR6/4 i:7.5YR6/4	回転糸切り		6	3
25	土師器	杯	SK5	TR(9.8),LR(7.1),H3.3	o:7.5YR7/4 i:7.5YR7/4			6	
26	土師器	杯	SK5	TR(12.0)	o:7.5YR7/4 i:7.5YR8/4			6	
27	土師器	杯	SK5	LR(7.8)	o:5YR7/6 i:7.5YR7/6	回転糸切り		6	3
28	瓦器	椀	SK5	TR(12.0)	o:7.5Y5/1 i:7.5Y5/1			6	
29	土師器	杯	SP78	TR(10.8),LR5.3,H2.3	o:10YR7/4 i:10YR7/4		スノコ痕	7	3
30	土師器	杯	SP84	TR(12.0)	o:10YR8/3 i:10YR8/3			7	
31	土師質	燭台	SP105	LR(6.3)	o:10YR6/4 i:10YR6/4	回転糸切り		7	3
32	瓦器	椀	SP57	TR(13.2)	o:5Y4/1 i:5Y4/1			7	
33	須恵質	捏鉢	SP57	LR(12.6)	o:N6/ i:N6/		東播系	7	3

表8 掲載遺物一覧(2)

番号	種別	器種	出土情報	法量	外面色調 内面色調	調整	備考	図	図版
34	磁器	白磁碗	SP62	—	o:5Y8/1 i:5Y8/1			7	
35	土製品	丸瓦	SP94	T1.8	o:5Y7/1 i:5Y7/1	o:縄目 i:布目	須恵質	7	3
36	土製品	平瓦	SP73	T1.7	o:5Y6/1 i:5Y6/1	o:布目 i:縄目	須恵質	7	4
37	土製品	平瓦	SP118	T1.6	o:5Y5/1 i:5Y5/1	o:布目 i:縄目	須恵質	7	4
38	金属製品	腹巻胸板	SP90	—				7	4
39	金属製品	釘	SP162	W1.5,T0.4				7	4
40	金属製品	釘	SP62	W[12.8],T0.4				7	4
41	土師器	椀	Ⅲ層	—	o:10YR4/1 i:7.5YR7/4		円盤高台	8	
42	土師質	甕	SK1	TR(21.2),NR(18.4)	o:10YR4/3 i:10YR4/4			8	4
43	土師器	杯	Ⅲ層	TR(9.8),LR(7.1),H3.3	o:10YR7/3 i:10YR7/3			8	
44	土師器	杯	Ⅲ層	TR(10.4),LR(6.8),H3.6	o:7.5YR7/4 i:7.5YR7/4			8	
45	瓦質	三足羽釜	Ⅲ層	TR(20.3)	o:7.5Y6/1 i:5Y8/2			8	4
46	瓦器	椀	Ⅲ層	TR(16.0)	o:N4/ i:N3/		和泉型	8	
47	須恵質	捏鉢	Ⅲ層	—	o:5Y6/1 i:5Y6/1		東播系	8	4
48	磁器	青磁碗	Ⅲ層	—	o:7.5Y4/2 i:7.5Y4/2			8	
49	磁器	白磁碗	Ⅳ層	—	o:10Y8/1 i:10Y8/1			8	
50	土製品	土錘	Ⅲ層	R1.1	o:7.5YR6/4		管状土錘	8	4
51	土製品	土錘	Ⅲ層	R1.1	o:5Y6/1		管状土錘	8	4
52	その他	炭化米塊	Ⅲ層	—			棒状	8	

表11 出土遺物一覽(3)

時期	出土情報	種別	部位	器種	区分	点数	掲載番号	
古墳 中世	SP122	土師質	脚部	三足羽釜	B	1		
		土製品	胴部	平瓦	C	1		
	SP128	須惠器	底天井部	蓋杯	B	1		
	SP129	土師器	胴部		C	1		
	SP155	弥生	底部	甕	B	1		
		須惠器	胴部		C	1		
	SP156	須惠器	胴部		C	2		
		土師器	底部	杯	B	1		
		土師器	胴部	皿・杯	C	1		
		須惠質	口縁部	捏鉢(東播)	B	1		
	SP162	土製品	胴部	丸瓦	C	1		
		土師器	底部	杯	B	1		
		土師器	胴部	皿・杯	C	1		
		金属製品	頭部	釘	A	1	39	
	SP167	土師器	胴部	皿・杯	C	1		
	SP171	須惠器	口縁部	甕	B	1		
	SP173	土師質	胴部		C	2		
	SP174	須惠器	胴部		C	1		
	SP180	須惠器	底天井部	蓋杯	B	2		
	SP185	弥生	底部	甕	B	1		
III層	須惠器	底部	杯		A	B	1	
					B	B	1	
					C	C	17	
	土師器	口縁部	杯		A	2	43,44	
					B	3		
					A	1	41	
					B	1		
					B	7		
	土師器	胴部	皿・杯		C	53		
					C	53		
	瓦器	口縁部	椀		A	1	46	
					B	2		
					C	3		
	土師質	口縁部	甕		B	2		
					B	2		
	土師質	脚部	三足羽釜		B	1		
					C	33		
	須惠質	口縁部	捏鉢(東播)		A	1	47	
					C	20		
	瓦質	口縁部	三足羽釜		A	1	45	
					A	1	48	
	磁器	口縁部	青磁碗		B	1		
					C	1		
土製品	胴部	土瓦		A	2	50,51		
				C	1			
金属製品	胴部			C	1			
				C	1			
その他		炭化米塊		A	1	52		
				A	1			
IV層	土師器	口縁部	皿・杯		B	1		
					B	1		
					C	2		
	磁器	口縁部	白磁碗		A	1	49	
土製品	胴部	瓦		C	1			

第6章 まとめ

今回の調査では、主として弥生時代前期と中世の遺構を検出したが、調査区は狭小で、集落のごく一部を断片的にかいま見たにすぎない。本遺跡が立地する頓田川右岸地域では、近年多くの発掘調査が行われていて資料が蓄積されつつある。本遺跡周辺においても、郷桜井八反地遺跡や桜井小中学校(国分尼寺跡)、桜井浜ノ上遺跡などで発掘調査が行われている。これらの遺跡では、弥生集落の存在・古墳時代から古代にかけての散発的な遺物の出土と明確な古代遺構の欠落・安定した中世の集落経営、という共通の現象が認められる。

弥生時代の遺構・遺物は、今回の調査でも土坑を検出し、遠賀川系土器が出土している。また、本調査区の西約300mにある旦遺跡11区でも包含層中から遠賀川系土器がまとまって出土している。両遺跡とも砂丘状の微高地に営まれた遺跡である。頓田川の現在の河道は、朝倉盆地が今治平野へ開口する宮ヶ崎付近で北北東へ向きを変え、唐古台丘陵の北辺へ向かってほぼ一直線に流れたのち、丘陵を取り巻くように東へ向きを変えて燧灘へ流れ込む。この河道は安永4年から5年(1775・1776)にかけて改修されて固定されたもので、それ以前は蛇行し頻繁に河道を変えていたものと考えられる。頓田川右岸の地形は北西から南東へ緩やかに傾斜する扇状地性の沖積平野である。現在、その中心付近には大川が流れているが、その規模からこの平野が大川によって形成されたとは考え難い。つまり、この平野は蛇行する頓田川が運んできた土砂によって形作られたもので、大川は頓田川の河道痕跡である可能性が高い。大川の河口が大きく湾入して川幅に似つかわしくない規模であることや、堆積物の供給源として適当な河川がないにもかかわらず、沖浦に長大な砂丘が形成されているのはこのためと考えられる。バイパス工事に際して、この平野を線状に横断して発掘調査が行われたが、登畑遺跡や旦遺跡は、微高地と低地が交互に繰り返される波板状の地形であり、こうした起伏は頓田川の蛇行により形成された自然堤防とそのバックマーシュであると考えられる。一方、海浜部には頓田川の運搬した土砂が潮流の影響を受けて海浜砂堆が形成されていたと考えられる。こうした自然堤防や海浜砂堆に弥生時代前期の遺跡が営まれているという事実は、遅くとも縄文時代の終り頃までにはこれらの微高地が形成され、安定した住環境が用意されていたことを示唆している。

中世には、登畑遺跡・旦遺跡・郷桜井八反地遺跡・郷桜井堀遺跡・桜井浜ノ上遺跡など各所に集落が営まれ、これらの集落からは少量ながらも輸入陶磁器が出土する。こうした現象を国分寺や国分尼寺の経済的影響力存続の証左とする考え方もあるが、藤原純友による伊予国分寺の焼討ちに象徴されるように、律令制度の崩壊と古代的権威の失墜は想像以上に急速であり、その経済基盤が中世以降も存続したとは考え難い。むしろ、為政者にとっては、古来伊予国の政治・宗教の中枢であったこの地域を掌握することが伊予国を支配するという象徴的意味において重要であったのであり、かつ、河野氏の台頭以降は常に東の勢力に対峙する最前線として、戦略的価値の高い地域と認識されていたと考えられるのである。

参考文献

山本正廣 1994 『郷桜井八反地遺跡』 今治市教育委員会

原畑静佳 1998 『登畑遺跡』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

櫛部大作 1998 『登畑寺居遺跡II』 今治市教育委員会

田坂嘉則 2000 『桜井浜ノ上遺跡』 今治市教育委員会

三好裕之ほか 2000 『旦遺跡』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

藤村啓修 2001 『伊予国分寺跡確認調査』 今治市教育委員会

三好一史 2006 『郷桜井掘遺跡』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

版 图

凡 例

1. 遺物写真の縮率は、約1/3である。
2. 遺構写真・遺物写真とも真鍋が撮影した。



完掘状況(北東より)



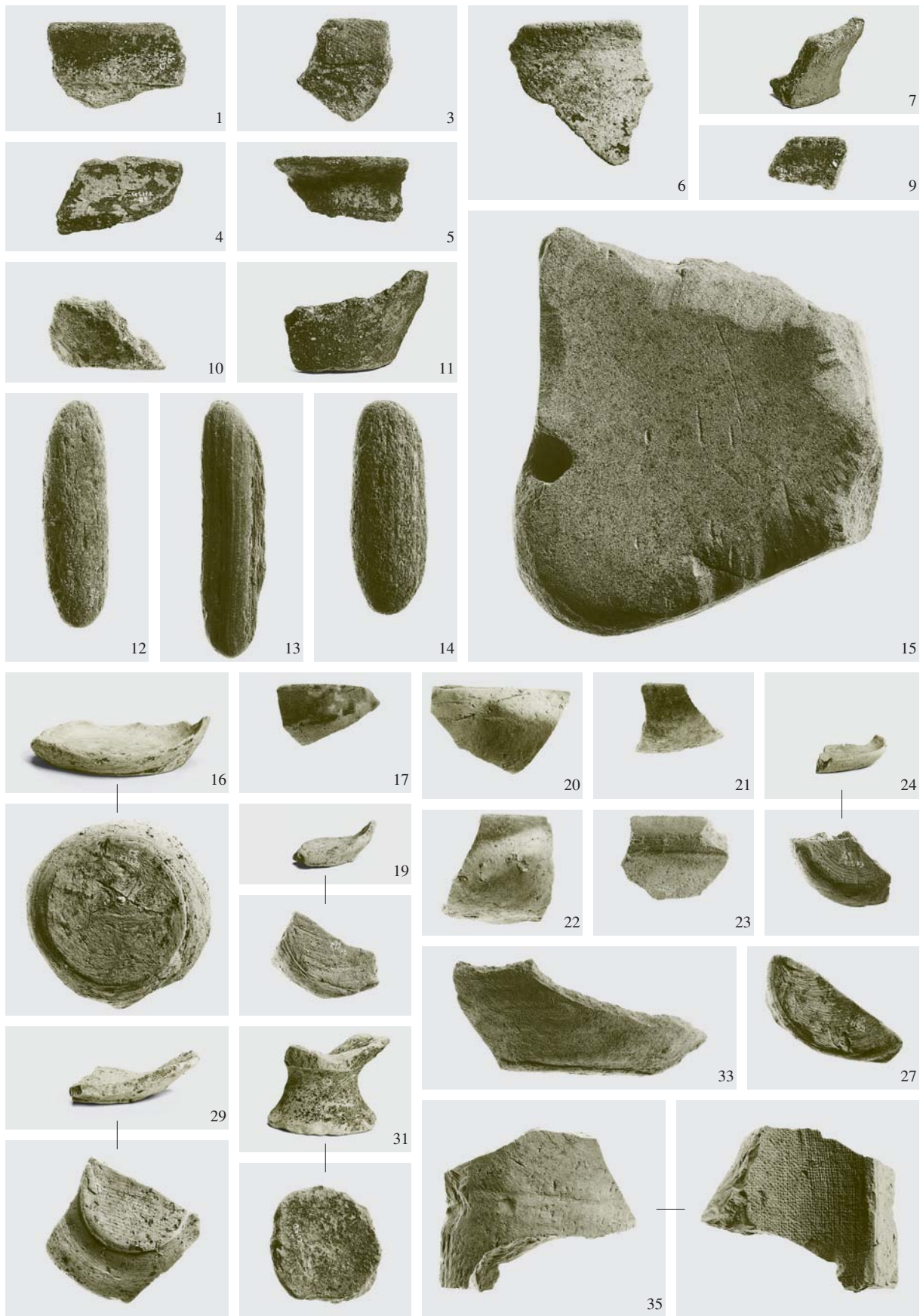
西壁基本層序(東より)



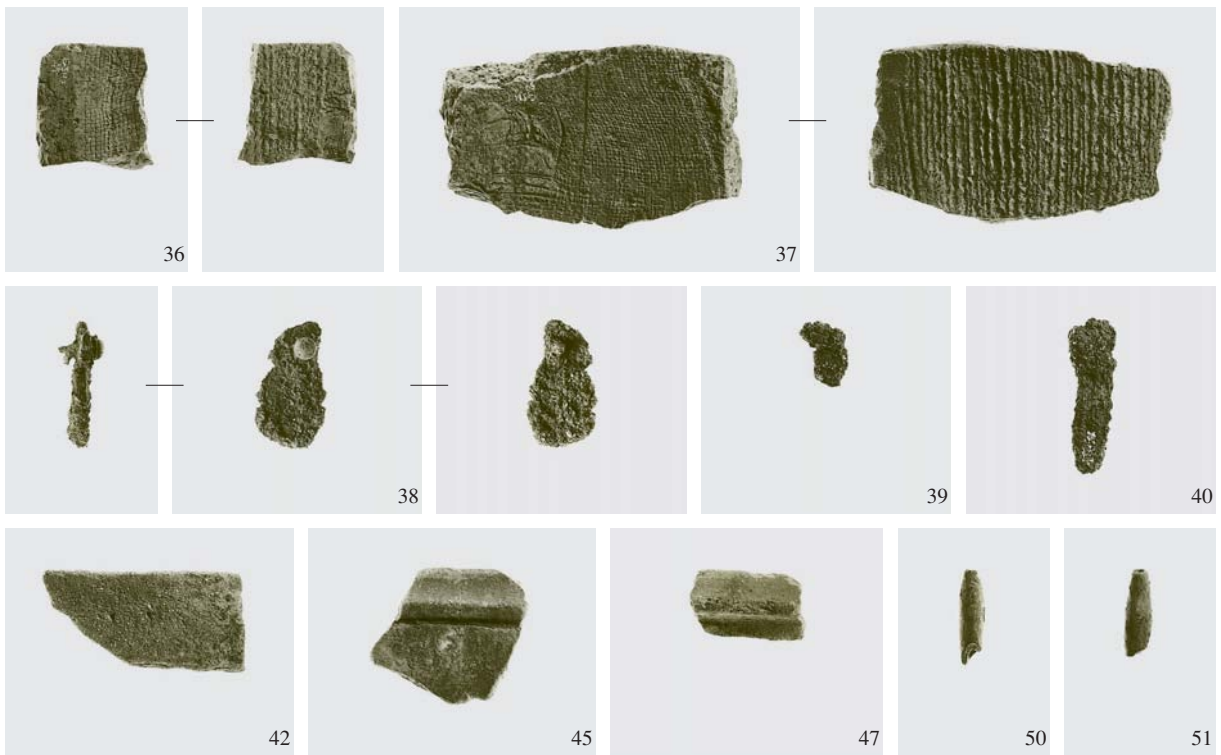
SK1遺物出土状況(南より)



SP61土層堆積状況(東より)



図版 4
出土遺物 2



報告書抄録

ふりがな	ごうさくらいほりいせきにじ							
書名	郷桜井堀遺跡2次							
副書名	一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 2							
巻次								
シリーズ名	埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第137集							
編著者名	眞鍋 昭文							
編集機関	財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒 791-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68-1 TEL (089) 911-0502							
発行年月日	西暦 2007年 1月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° , ' , ''	東経 ° , ' , ''	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごうさくらいほりいせき 郷桜井堀遺跡	えひめけんいまぼりし 愛媛県今治市 ごうさくらい 郷桜井1丁目267-3外	38202		34°01'52"	133°01'50"	20061003) 20061031	110	一般県道 桜井山路線 道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
郷桜井堀遺跡	散布地	弥生・中世	土坑・柱穴	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・陶磁器・土製品(瓦・土錘)・石器(敲石・石皿)・金属製品(釘・腹巻胸板)・炭化米塊		弥生時代前期の遺構・遺物を検出。中世では甲冑の破片が出土。		
要約	浜堤状の微高地上に営まれた集落である。弥生時代では遠賀川系土器がまとまって出土した。古墳時代以降、中世にかけての遺物が出土しているが、古代の遺物は希少で、国分尼寺との関連を想起させるような痕跡は認められない。中世では12世紀後半から13世紀前半頃の遺物が多い。遺構は土坑のほかにも多数の柱穴が検出されたが、具体的な建物配置等は不明である。							

埋蔵文化財発掘調査報告書 第137集

郷 桜井堀遺跡 2次
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成19年1月

編集・発行 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
愛媛県松山市衣山四丁目68-1
TEL (089) 911-0502

印刷 岡田印刷株式会社

